

---

# 動きだす鼓動

亜紋

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

動きだす鼓動

### 【Nコード】

N7803B

### 【作者名】

亜紋

### 【あらすじ】

夜の公園で寝ている恭介が何回かここに来ていると一人の女性の香織が声をかけ鼓動が動き出す

俺は誰もいない公園で一人寝ていた。

空は暗くなっていて、星が見えた。  
綺麗な星に見とれていた。

「なぐにしているのかな」

聞き覚えのない声に驚いた。  
女性の声だった。

振り向くとかわいかった。

「誰でしたっけ」

かわいい人を忘れたと後悔していた。

「初めてだと思っよ、私はあなたがよくこの公園にきていることわ  
知っているけど」

「何で知っているの」

「この公園をよく通るからいつも気になっていたの」

「ふーん、そっか」

「それで何していたの？」

「星を眺めていたんだけど、一緒にどう？」

「それって、私と一緒にいて欲しいの？」

「さあね、俺もわからん」

「そっか」

不思議と、この女性に惹かれていた。  
初めて会ったと思えなかった。

「名前まだ聞いていなかったね」

「私、私は藤川 香織よろしく、あなたは」

「俺は瀬尾 恭介」

「恭介は何でここに來ているの？」

いきなり友達のように話かけてきた。

「香織は何でそんなこと聞くの？」

香織はクスクスと笑っていた。

「気になるから、ダメかな」

香織は照れくさそうに言った。

「別に隠すことじゃあないし、暇だからかなここに来るの」

「ここに来たらまた会える?」

「わからない」

「そっか、それなら連絡先教えて、また会いたいから」

連絡先を教えて公園を出た。

俺の中で何かが動きだした。

翌朝携帯の画面にメールのマークがあった。

香織からだった。

今日も来てね

それだけだった。

夜昨日と同じ公園にいった。

香織がいた。

下ばかりみていた。

「どうした」

香織が驚いた顔で俺を見た。

「ありがとう」

「ああ、どうかしたのか、泣いてただろ」

目元に拭き取れていない涙がみえた。

「振られるのわかっていたんだけど、やっぱり辛いね」

「そうだな」

他に香織に言う言葉が見つからなかった。

「恭介が来なかったら、自殺するきだったの」

「残念だったか？、それともうれしい」

「うれしいかな」

「何で？」

「かけがえのない人になったから、二回しか会ってないのに変かな？」

「いいんじゃないか、人は一人では生きていけない、会う人全て運命の人だから」

「うん、ありがとう私達は運命の出会いなんだね」

「そうだね、俺は香織にたぶん一目惚れしたんだと思う」

「私もだからうれしいな、でもたぶんのところが気に入らないねけどね」

いつのまにか香織は笑顔に戻っていた。

「付き合おうか、幸せにできるかわからないけど」

「ならないかも、でも好きな人になりたい」

「そうだね」

俺と香織は唇どうしが、触れ合うのがスイッチのように動き出す。  
加速する、何もかも置いて、加速する。

新しい自分のために、そしてこれからある運命のために

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7803b/>

---

動きだす鼓動

2011年1月27日11時25分発行